

校長室だより  
NO. 38  
平成30年11月12日

# すべては光る

梅園小学校長  
たか すりょうへい  
高 須 亮 平

## 梅園再発見 28 ～岡崎石匠組合の創始者・嶺田久七みねた きゅうしち

随念寺の墓地の小高い所に、嶺田家の初代から4代までの墓と5代（文政9～明治15）、6代（嘉永4～明治31）、7代（明治3～45）の墓、嶺田家骨堂が西を向いて並んでいます。すべて「久七」の名を受け継いでいます。その5代目久七（幼名・幾次郎）の墓碑銘には次のように刻まれています。

嶺田氏祖先は、三河州設楽郡杉平村より出ず。当国額田郡岡崎裏町に移住す。世、石工を以て業と為す。（略）

また、初代墓石には次のように彫られています。

明和四丁亥二月十五日杉平産俗名久兵衛行年六十八才

これらから、初代久兵衛は明和4（1767）年に68才で亡くなっていますので、元禄13（1700）年生まれと推定されます。15才頃の弟子入りとすれば、正徳5（1715）年頃に杉平村（現・新城市作手）から裏町（現・花崗町）に来たこととなります。いずれにしても享保年間（1716～35）には石工職人として誓願寺入口付近（右写真）に家を構えたと考えられます。

その頃の岡崎は東海道の宿場町であり、古くから石で作った人形や馬、犬などの土産物を買っていたと伝えられていますが、石材としての実用価値が見出されたのは、享徳元年（1452年）の岡崎城築城の頃、三河の守護代西郷稠頼つぎよりが、現在の小呂・滝の庄屋に命じて花崗岩を上納させたのが始まりということです。その後、家康の祖父松平清康が城下町として整備を始め（入城1524年）、天正18（1580）年、田中吉政が城主になり、東海道を城下に導いた町の整備を行いました。このとき、泉州岸和田の石工、春木某一党が招かれて随念寺門前に住まいを与えられ石工事に従事し、そこが東海道の裏手で本陣も近くであったので、街道を行き交う旅人や参勤交代の大名たちの目にもよく止まったということです。そして旅人を通して広がり、大名が燈籠を買い求めたり、徳川家縁の神社仏閣に奉納することも多かったです。岡崎の石工業は全国に名が知られるようになりました。

嘉永年間の「参州名所図絵」には、花崗町一帯が次のように紹介されています。

石切町と云い、両側に石工並びて数十軒あり、其の製するところ、当所をもって最上とす。故に近国は更なり、江戸、大阪へ運送して是を鬻ぐ事果多し。

重い石工品を遠方まで売りさばくことができたのは、城下を流れる菅生川の土場から川船で矢作川河口の西尾平坂湊へ、千石船に積み替えて江戸大阪に運ばれました。

明治の初めには石工数約30軒になり、そのうち燈籠を作っているのはわずか5～6軒と言います。しかし、明治10年代に入り再び盛んになりました。それは、嶺田



5代目嶺田久七の墓



左側が嶺田久七石材があったあたり  
（中央が誓願寺の入口の石柱）

家が2つの偉業を成し遂げたことにあり、現在の岡崎の石工業振興の基となりました。

まずその1つは、明治10(1877)年、東京で開かれた第1回内国勸業博覧会(国内産業発展を促進し魅力ある輸出品目育成を目的とした博覧会)で、5代目久七が石燈籠1基を出品し褒賞を受けたことでした。もう1つは、明治17(1884)年、6代目久七(幼名・茂三郎)が岡崎石匠組合を創設させたことでした。以来、久七は組合長として活躍し、技術の改善と販路の拡大が図られました。全国の鉄道の整備や日清・日露戦争後の産業経済の発展とともに、岡崎は石の町として全国的に有名になりました。さらに7代目久七(幼名・準之助)は、郡会議員にも選ばれ、岡崎石工業交流・発展のために大いに力を奮ったのでした。

また、明治39(1906)年6月から9月にかけて、日露戦争の講和条約であるポーツマス条約締結に基づく樺太国境画定の境界線の標が、北緯50度の地に建てられました。その4基の天測境界標石、17基の中間標石、3基の錘体標は岡崎産の花崗岩であり、嶺田久七の店から送り出されていました。

岡崎産が選ばれたのは「日本風景論」で三河の花崗岩のすばらしさを全国に紹介した志賀重昂が樺太国境画定委員であり、岡崎商工会議所の特別会員でもあったことによることから推察されます。それで岡崎の花崗岩が三重県以東の三角点の標石に採用されたり、日露戦争後の樺太国境画定の際に岡崎の石工たちが岡崎産花崗岩で作った標石を設置されたりしました。また、政府要人にも高く評価されていました。

志賀重昂の日記には次のように記されています。

ポロナイ川岸の第二測点に達し、馬を下ると此処には日本の石工が汗を拭いつつ境界標石を彫刻している。これは参州岡崎の北に産せし最も堅き花崗岩にて南面には日本領として菊花の御紋章、北面には露国領として双頭の鷲を刻るのである。丁度南面の菊花と大日本帝国境界の文字が刻り上がり而かも見事に出来上がりたれば、予は石工の頭領(和田)に向い善く刻れたな一とさげふ。

また、7代目嶺田久七が参謀本部の御用商人として活躍できたのも、こうした志賀重昂の手引きによるものでした。伊藤博文の墓も久七の手によるものと言われます。

明治天皇が崩御された翌日、7代目久七が刺殺され、妻のかが深手を負わされる事件が起きました。それは、久七の跡継ぎと言われていた愛弟子によるものでした。久七の愛弟子への期待はたいへんなもので、愛弟子へは石工としての技の錬磨はもちろん、日常茶飯事に至るまで相当厳しかったようでした。若い愛弟子には、久七夫妻の石工としてのしつけを素直に受け入れられなかったのでしょうか。事件後、すぐに自首した愛弟子には多くの同情が集まり、一方、久七の霊前には各界からその死を惜しむ弔辞が寄せられました。



久七の亡き後も、岡崎の石工業は石匠組合を軸として発展を続けました。明治26(1893)年4月の「岡崎町商工業台帳甲乙二帖」には石工業者は44軒でしたが、大正5(1916)年には組員210人、石製品販売業者100人、従業員360人に至り隆盛を極めました。なお、嶺田家代々の石作品は岡崎市やその周辺に現存していますので、その一部を裏面で紹介しました。また、昭和初期の花崗町の地図も掲載しました。誓願寺入口に嶺田久七石材店を確認することができます。

今回は『岡崎の人物史』、『石都岡崎 石と共に生きる』等を参考にしています。



岡崎とその周辺に存在する嶺田家の作品

① 3代目嶺田久七

文化10（1813）年5月建立  
常夜灯（花崗町）



3代目嶺田久七の常夜灯(花崗町)



常夜灯中央部の彫刻(正面の龍)

② 4代目嶺田久七

文政5（1822）年建立  
常夜灯（連尺町、現在・公園団地入口）



4代目嶺田久七の常夜灯  
(石の公園団地)

③-1 嶺田久兵衛

嘉永6（1853）年建立  
水盤 普元寺（一色町味浜）



嶺田久兵衛の水盤(普元寺)

水盤の脚の彫刻

③-2 安政4（1857）年建立

灯籠 満性寺（菅生町）



嶺田久兵衛の灯籠(満性寺)

※ 久兵衛は、2代目久七の代に分立したと言われる。

④ 5代目嶺田久七

明治9（1876）年建立 岡崎天満宮狛犬（向かって右）



5代目嶺田久七の狛犬  
（岡崎天満宮）

『参陽商工便覧』（明治21年）に見る嶺田家



昭和初期の花崗町の地図

